
小作品 「魔法少女に祝福を」

Anacletus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小作品 「魔法少女に祝福を」

【Nコード】

N0082Z

【作者名】

Anacleetus

【あらすじ】

魔法少女は祝福されていません。
ただ、一人を除いては。
これはそんなお話。

小作品 「魔法少女に祝福を」

僕には秘密がある。

別に中二病設定満載の邪気眼気味な物語乙という、そういうアレではない。

別に異世界転生最強勇者様的な特殊能力があったりするわけでもない。

別にSF設定満載に実は世界が崩壊してるとか宇宙人に狙われているとか超科学バトルしないと地球がアボンしてしまうのだ等という妄想もありはしない。

それどころか青春まつしぐらな世界観で恋愛だの勉強だのオレオレ哲学に嵌っているなんて事も無い。

一言で言うとなんの秘密とは結局大したものではない。

ただ、前フリするぐらいに隣の家の女の子がアレであるという。

その程度の話だ。

「お兄ちゃん!? あたし王神美空ことフェルベリーナ・ルミエールは今日から学校には通えなくなっちゃいました!? 何故かって訊かないで!!! 悪魔達を退けるには私が魔法少女にならないといけないの!!! そうしないと宇宙を統括する意志とフルコンタクト

した意味が無くなっちゃう！！ 地球を狙う超銀河帝国は別に地球なんて興味ない後百年ぐらいしたら侵略します乙展開だから、あたしに微妙な科学力のスーツとか天の川系の別政府は支給してくれないだもん！！ そうなったらあたしがもう宇宙の真理と融合しちゃって地球を今現在蝕んでいる別次元からの悪魔達を退けるしかないでしょ！！ あたしね！！ 実是不老不死で魔眼持つてるんだけどちょっと凄いんだよ。時を止めたり何故かもうお前は死んでいる展開な未来を引き寄せたり【ふッ、お前の未来はもう見えている】なんて簡単なんだから！？ これなら安心してお兄ちゃんも学校に通ってられるよね！？ 行ってらっしゃい！！」

「解った。今日は生理で休みって報告しておく」

「お兄ちゃんの変態！！」

「いや、むしろ美空の方がへんた」

ベチーンと朝から良い一撃をかまされて僕は今日も学校へと登校した。

学業がてら色々と回想する。

そう身構えるような回想は無い。

別に妹じゃない隣の山田さん家の妹が特殊でも何でもない中二病を発症しているだけである。

父親も母親もあまり家に帰ってこないの、彼女の妄想は留まる処を知らない。

更に言えば、娘の変容に付いていけなかったらしく親として匙を投げて見て見ぬフリをしている。

更に回想するなら、家の娘がお世話になっています＋口止め料＋お世話代で毎月四万貰っている身からすると中々に救いようがない。

好きで面倒を見ているものの、とりあえず軍資金は学生には死活問題なので受け取っている。

世間体というものは人間にとってそれなりに大事らしく支払いはキヤッシュできつちりだ。

ちなみにそんなお世話している妹の最新流行ネタはイケ面な地球外特撮ヒーローらしいが、彼女曰く【所詮、地球なんて何とも思っていない銀河政府がちょっと近場の警官に犯罪者の取締りを現地にやらせろやOK？な感じで対応させているだけの話】だったらしく受けは良くない。

回想を終え、学業を終え、家に帰ると何故か玄関先で一人体育座りの彼女がメソメソしているという事態となっていた。

「どうかした？」

「ふううつ。あ、悪魔にやられちゃった・・・負けちゃった・・・ッ・・・く・・・う・・・」

メソメソしている頬には手形がバツチリと付いている。

隣の家を見れば、車のタイヤが急発進したらしき跡。

母帰る 娘から悪者扱い ビンタ 逃げる とりあえず隣の子に任せておこう（今月の謝礼ちよっと上乘せ） 後はあなたの仕事だから NOW。

まったく外れていないだろう予想はさておきメソメソしている彼女を家へと招き入れる。

「こ、今度は悪魔の奴なんか、絶対倒すんだから！！！」

意気込んで台所や物置から色々と居間へと持ち出してきた彼女が幾つもの道具を前にメソメソしながら、手を震えさせながら、拳を握る。

とりあえずお茶を入れて茶菓子を出しながらテレビの当てにならない通販商品を解説する外国人に見入る。

「お、お兄ちゃん！？ あたしがやられちゃったのに何見てるの！！！」

ブツンとテレビが消される。

どうやらご機嫌を損ねたらしい。

「お兄ちゃんにも手伝ってもらうんだからね！！！」

テーブルの上を見ると包丁とライターと釘撃ち機とその他諸々の工具が容易されていた。

横を見ると笑いながら泣いている少女が一人。

「これであの悪魔をギッタンギッタンに」

感情に身を任せれば子供だろうが老人だろうが大概の事が出来るだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な、何？ まさか、お兄ちゃんも悪魔に降参するよう説得するつもり！？」

「別に。美空がしたいなら好きにすればいいと思うけど」

「ほ、ホント？」

ジツと上目遣いで見つめてくる瞳には人の欺瞞を見抜く力が宿っている。

邪気眼よりも余程に社会の大人を恐れさせる瞳だと内心想う。

嘘が上手い大人と虐げる事しかない大人を相手に魔法少女を長年やって培った力はそこの心理学者やカウンセラーなど鼻で笑えるだけのスキルだ。

欺瞞は決してその瞳を前に効力を発揮する事がない。

「君の両親は正直に言っただけ人間としては合格点ギリギリだ。恨まれなくても仕方ないと思う。仕事があつて、家庭を持って、生活と世間体を維持出来ても、君を見捨ててるから」

何やら傷ついたらしい彼女の顔が強張る。

「例えば、君が持ってきたその細いマッチ棒。これは美空風に言うなら聖者の炎。これを擦って灯った炎をあの悪魔が時々やってくる家に投げれば、悪魔は大ダメージ確定だ。仕事も家庭も生活も世間体も、悪魔が築いてきたものは皆燃え散る」

マッチを擦って灰皿の上に置く。

「もつと直接的にこの聖なる剣や槍で悪魔を殺せば、晴れて君はあの悪魔達から逃れる事が出来る」

見開かれた瞳はただこちらを見上げている。

感情が何処までも深く心を抉り抜いている。

考えなかったはずもないと長年の付き合いで知っている。

「でも、きつと君の前にはもつと大きな悪魔が立ちはだかる」

「大きな・・・悪魔？」

「君が知ってる悪魔は弱い。でも、君を本当に壊そうとする悪魔はもつと狡猾でもつと強くてもつと君を追い詰めると僕は知ってる」

「あ、あたし負けたりしないもん!？」

「愛と勇気と友情で？ 普通の悪魔にも勝てないのに？」

「それは・・・ど、どうにかなるんだから!-!」

「きっと正義を成せば悪魔達は美空にこう言う。【この間違い】【お前は悪魔だ】【恐ろしい奴】【犯罪者】【猟奇殺人犯】【放火魔】【正気じゃない】【あんたなんて産まなきゃ良かった】」

「!？」

見上げてくる彼女の顔は歪み、ガチガチと歯が鳴っていた。

その体が震える。

震える体に詰まっているはずの心は隙間だらけで、たぶんそんな罵倒には耐えられない。

耐えられたとしても決して二度と立ち上がれないよう【人間^{あくま}】は少女にレッテルと罰を下す。

「美空は悪魔から身を守る方法って知ってる？」

「ビームでズバーンで・・・」

思わず笑ってしまう。

「な、何がおかしいの!？」

「美空は魔法少女が悪魔を倒せないって知らないの？」

「え・・・・・・？」

呆然とする少女に少しずつ本当を教える。

「【悪魔^{にんげん}】は誰にも倒せない。どんなに倒したって意味なんて無い。次の悪魔が出てくるだけだよ」

「悪魔は倒せば・・・絶対にいなくなるんだから!!」

その叫びは魂の叫びだと理解する。

とても拙くて、とても純粹に、信じる事でしか己を救えない声。

「君が嫌いになる悪魔はきつと逆に増える。君を壊そうとする悪魔。君を罵倒する悪魔。君を侮蔑する悪魔。君を嘲笑する悪魔。美空はそんな悪魔を全て倒せる？」

「倒してみせる！ 倒せないわけないもん!! みんな、悪い奴は全部最後に消えて・・・消えて・・・いなくなる!!!」

「それじゃ、はい」

テーブル上の聖なる剣を握らせる。

「え？ お兄ちゃん!？」

「僕はきつとこれから美空を悲しませる悪魔になる。だから、倒してみて」

「な、何言ってるの!？ お兄ちゃんは悪魔なんかじゃない!!
そ、そんなの無茶苦茶だよ!？ お兄ちゃんはいつだってあたしを助けてくれた!! あたしが悲しい時も辛い時も傍にいてくれた!
! あんな悪魔達とは全然違うんだから!!」

「違う。僕は今まで君の大嫌いな悪魔からお金を貰ってたから」

「え？ なに……いつてるの……おにいちゃん……」

「君が大嫌いな悪魔から君を世話してるからって幾らか貰ってて。とりあえず家の家計に回させてもらってる」

「おにいちゃん……うそ……だよね？」

「本当の事だから。ほら、君の前にいるのは誰？」

「うそ……うそ……」

「悪魔は此処にいる。君の大嫌いな悪魔が」

震え過ぎた腕が、笑いながら泣いている瞳が、ゆっくりと近づいてくる。

「嘆いたところで倒せない。殺したところで増えていく。だから、悪魔から身を守る方法はたった一つ」

「おにい……ちゃん……」

「君が悪魔になればいい」

「……え？」

止まる刃先はもうすでに沈み始めている。

「迎合して生きていく。どこかで諦める。どこかで自分を偽る。そうすればいいって事」

「悪魔になんて・・・なれないよ・・・」

「希望なんて無いと知ればいい。誰にも頼れないと気付けばいい。自分が一人ぼっちだと理解すれば、君は嫌いな悪魔のようになれる」

「ちが・・・うよ・・・おにいちゃん・・・」

「一人で清く正しい魔法少女をやってるより、悪魔になった方が楽だよ？」

「どうして・・・そんなこと・・・いうの・・・」

「その方が君の為になる。それだけの事さ」

「・・・う・・・あ・・・」

冷たい感触が消えていく。

ボロボロと泣きながら、彼女はもう刃を取り落としていた。

「悪魔は倒すんじゃないかったの？」

「できるわけ・・・できるわけないよツッ!? お兄ちゃんはツ、お兄ちゃんは助けてくれた!! 寂しい時も苦しい時も一緒にいてくれた!!」

「でも、僕は君を悲しませる悪い悪魔だ」

「悪魔だっていいもん！！　そんなの構わないもん！！　いなくなったらヤダッツツ！！」

「悪魔は嘔吐きだし愛も夢も希望もない。誰かを傷つけても平気な顔で偽善ばかり垂れ流す。でも」

ポンポン頭を叩く。

「愛や夢や希望なんてものを語る魔法少女よりは好きになれる」

「どう・・・して？」

「だって、そっちの方が何かと人間らしいから」

「人間らしい・・・？」

「憎しみ、恨み、それでも愛したりするから、誰だってそれが尊いんだって解る。誰だってそうだ。そういう自分の醜さと戦ってる」

「醜さ・・・」

「君は苦しんでる事も泣いてる事も僕に打ち明けてくれた。でも、誰もがそうじゃない。君みたいに魔法少女になれるわけじゃない。綺麗事で済ませられない何かを背負ってる。背負っていかなくやらない。君の憎む悪魔すら立ち向かうべきものやどうしようもない事に悩んでる。時に傲慢でも時に残酷でも、どうにかしようと足掻いてる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「例えば、君が嫌いな悪魔だって、クズではあるけど親だ。幸子がどうしてあんなに働いてるか知ってる？」

彼女が首を横に振る。

「借金がある。ちなみに家を売っても返せない額」

「!？」

「君がお金で苦労した事が無いのは君のクズな親がクズなりに迷惑を掛けないよう生きてるからって事」

「知らなかった・・・」

「・・・明日から学校ぐらい行ったら？」

「・・・考えてみる・・・」

(全てはこの地獄のような浮世の随に・・・)
まじき

僕には秘密がある。

別に中二病設定満載の邪気眼気味な物語乙という、そういうアレではない。

別に異世界転生最強勇者様的な特殊能力があったりするわけでもない。

別にSF設定満載に実は世界が崩壊してるとか宇宙人に狙われていたりとか超科学バトルしないと地球がアボンしてしまうのだ等という妄想もありはしない。

それどころか青春まつしぐらな世界観で恋愛だの勉強だのオレオレ哲学に嵌っているなんて事も無い。

一言で言つと僕の秘密とは結局大したものではない。

「行こう。お兄ちゃん!」

「はいはい」

「………ねえ」

「なに?」

「どうして、お母さんの名前知ってたの?」

「何が? それよりお母さん?」

「な、何でもない。悪魔は悪魔だもん!! 早く学校行こう!」

ただ、隣の家に暮らす実の妹が少しは幸せに暮らせていればいい。

そう、その程度の話だ。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0082z/>

小作品 「魔法少女に祝福を」

2011年11月30日17時55分発行